

戦後における福井都市計画の変遷について

米村 貴子

福井都市計画の変遷を知るために参考文献を探したところ、私自身が求めるような『開発史』がこれまで書かれていないようであったので、今回の卒論で、独自の「福井都市計画史」をつくることにした。

まず、その第1段階として、戦後行われてきた福井市の都市計画を、①土地区画整理事業、②道路事業、③用途地域、④市街化区域、⑤公園・緑地、⑥市街地再開発事業の各事業別に振り返った。

その結果、戦後の福井市の都市計画は「土地区画整理事業」に基づいて開発が行われてきた、と判断することができたので、「土地区画整理事業」を中心とした『開発史』をつくりはじめた。

◆第1期（昭和20～33年）

『戦災復興期』：昭和20年の戦災の被害により市街地の約95%が焼失し、さらに昭和23年には震災の被害を受け、福井市は壊滅状態に陥った。

その再建に、福井駅を中心とした中心市街地において「戦災復興土地区画整理事業」が実施された。

よって、昭和33年に新しく土地区画整理事業が始められるまでを第1期と決定した。

◆第2期（昭和34～39年）

『第1次都市膨張期』：昭和20～25年までの人口伸び率が約55%を示しているように、戦後都心部への人口集中が起ってきた。また新たな町村合併が始められたために、中心市街地に最も近く、かつ新市街地（合併された町村）に隣接している地域の整備が早急に必要となってきた。

以上により、この時期を第2期と決定した。

◆第3期（昭和40～49年）

『第2次都市膨張期』：昭和30年代に起った都心部への人口集中により、都心周辺地への人口移動が盛んになった。また、昭和43年の「福井国体」の開催にむけて、「環状西線」や「東縦貫線」が計

画決定された。このため、これらの幹線道路沿線が面的に整備されたことが確認された。

よって、この時期を第3期と決定した。

◆第4期（昭和50～56年）

『ふるさと充実期』：昭和48年のオイルショック後、昭和52年に「第3次全国総合開発計画」が決定され、「定住圏構想」が打ち出された。これにより、全国的に故郷を見直そうとする動きが起り始めた。福井においても、開発よりも文化的施設事業に力を入れたようであり、美術館、博物館、図書館、体育館などが建設された。

よって、この時期を第4期と決定した。

◆第5期（昭和57～59年）

『新住宅用地確保期』：近年、福井市においても核家族化が急速に進んだ。昭和50～55年の人口と世帯数の伸び率をみると、世帯数の方が人口よりも2倍以上の伸び率を示している。また、地盤が弱く開発が遅れていた地域や、人口が減少し続けている地域が開発・整備されたことが確認された。

このため、この時期を第5期と決定した。

◆第6期（昭和60年以降）

『中心市街地再開発・再整備期』：昭和30年代から、次々と周辺地域が土地区画整理事業によって開発されていった。それに伴い福井駅周辺の中心市街地においてドーナツ化現象がおきはじめ、中心市街地が衰退してゆく結果となった。中心市街地の復興を目指し、活力を取り戻すために、昭和60年以降、「御屋形地区再開発事業」や「福井駅周辺土地区画整理事業」、「福井駅付近連続立体交差事業」等が行われてきている。

よって、昭和60年以降を第6期と決定した。

以上のように、戦後の福井市の都市計画の歴史を検証し、6期に分けることができた。